

どうしてカノジョを
つくろうとしないの？

内容見本

※ 一部のページのみ掲載しています。

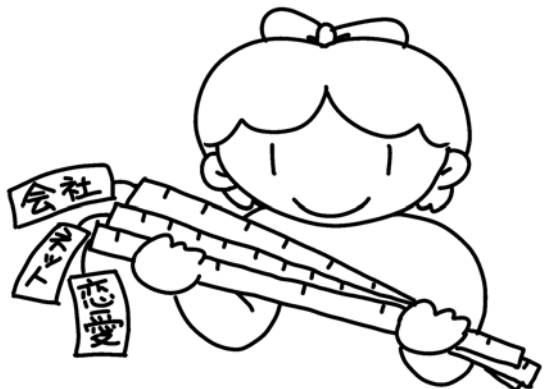
<http://kan-chan.stbbs.net/dojin/>



もくじ

第一部 非モテ問題	5
「非モテ」と「草食男子」の時代.....	6
きれい好きでも“清潔感なし”？	9
“モテ”は人を測る“モノサシ”？	13
第二部 独身者と非婚問題・少子化問題	17
「内助の功」は死語？	18
結婚資金を奪う“独身税”	20
“命のバトンを次世代に渡す”のは“人間の義務”？	23
独身者は“年金にタダ乗り”してるの？	26
「どうして結婚しないの」と聞かれたら？	28
自分にできるところから始めよう	30
謝辞	32
既刊のご案内.....	33

第一部 非モテ問題



「非モテ」と「草食男子」の時代

氷河期世代の行動はわからん！

「最近の若いモンは、ホンット、よくわからん。周り見ても、みんな結婚しないなあ」。

中高年世代に時々言われる言葉です。皆さんもご存じでしょうが、バブルがはじけた後に社会人になった「就職氷河期」世代(私自身もそうです)の、未婚率のなんと高いことか。

「私の子供たちも、知り合いの同じくらいの年代の子たちも、そろそろそんな事考えてもいい年頃なのに、本当にみんな結婚しないんだよなあ。恋人はいて、仲良くやってるみたいなんだけど」。

そんな中、最近ネットをにぎわす二つのキーワードがあります。「非モテ」と「草食男子」です。

「電車男」の陰に

「モテない男女」たちの声というものは、これまであまり表に出ることがありませんでした。しかし、インターネットの普及が、これまで語られることの少なかった、そのような声を広く知らしめることになりました。

そのような人たちは自分のことを「喪男」「喪

女」(モテない男、モテない女の略)とか「非モテ」と呼び、インターネットの掲示板に集まったり、ブログを立ち上げて、自分の気持ちを吐き出したり、意見を交換しあうようになりました。そんな中で生まれた「電車男」の物語は、あえて説明するまでもなく皆さんご存じでしょう。

しかし、「電車男」のように非モテを「脱出」できたのは、例外的なことでした。まあ、例外的だったからこそ、あんなに大きな話題になったのかもしれない。

二種類の「非モテ」

さて、「非モテ」と一言と言っても、大きく分けて二種類に分けられます。「モテたい非モテ」と「モテたくない非モテ」です。

「モテたい非モテ」は、「本当はみんなと同じように、高校時代や大学時代に異性とキャッチャウフと楽しくお付き合いしたかったのに、その夢が果たせなかった」、そして社会人になってもそのトラウマを引きずっている、そんな人が多いものです。

理由は人それぞれですが、私が観察してい



きれい好きでも“清潔感なし”？

「オタクは毎日歯を磨け！毎日風呂入れ！」
「非モテ」の話題となると、決まってこんなセリフを聞くものです。「清潔感のないかっこうをしているからモテないんだ」といいます。

しかし、言われた当人たちからは、こんな反論が来るでしょう。「毎日歯を磨いて、毎日風呂に入っていて、衛生には十分気を遣っているはずなのに、どうして自分は嫌がられるんだろう」と。どうやら、「清潔感がない」と指摘されたところで、衛生面に気を付ければ良いかという、そう単純にはいかないようです。

「衛生的」「清潔」と「清潔感」の違い

そもそも、「清潔感」とは何でしょうか。

- 1)衛生的な様子
- 2)きれいで整っている様子
- 3)清潔をイメージさせる色合いやデザイン
- 4)清々しい心や態度や雰囲気
- 5)顔かたちが整っている様子

そう、清潔感＝清潔、衛生的という意味ではなく、実は広い意味を持つ言葉です。大きく分けて、上の5つに分類できるかもしれません。

まず、文字通り汚れていたり、バイキンで汚染されたりせず、衛生的であるという意味での「清潔感」があるでしょう。これは誰もが想像の付きそうなことですが、先に挙げたモテないオタクたちも、この意味での「清潔感」を連想しているかも知れません。

次に、部屋や庭や車が片付いている、髪を櫛やブラシで整えてある、シャツやズボンにアイロンがかかっている、といった、「きれいで整っている様子」という意味での「清潔感」も挙げられます。

さて、皆さんはトイレの壁紙を張り替える時、

どんな色を選ぼうと思いますか。白や水色は「清潔感のある色」と言われて人気が高いですが、逆に茶色とか灰色は白や水色ほど人気がありません。やんちゃな小学生だったら、茶色を「うんこ色」、灰色を「お墓色」などと呼んで茶化すかもしれません。

また、態度や人の雰囲気といった、精神的な意味での「清潔感」というものもあるでしょう。

顔かたちが整っているのが「清潔感」？

しかし、場合によっては、ひどい使い方も時々耳にします。「あいつはデブだ」「不細工だ」「服装がダサい」などという意味の遠回しな表現として、「清潔感がない」と言うのです。

しかし、それをどうやって直せというのでしょうか。ニキビ面や、顔のあざや、はげや、皮膚の荒れを、一生懸命努力して治す方法を知っていますか。整形手術をしるとでも言うのですか。確かに、金を積めば何とかなる分野もあるとは言え、誰が整形費用や「ダサくない」服の代金の何十万、何百万円を出してくれるのでしょうか。

それに、肥満体の相撲取りやサンタクロースは好きなのに、身近にいる太った人には露骨に嫌な顔をするのは、えこひいきではないでしょうか。「肥満は、自分の欲望をコントロールできない弱さの表れだ」と言っている本人が、自分は弱いものいじめをしたいという歪んだ欲望をコントロールできないのですか。

そう、これは「弱いものいじめ」です。もう一度はっきり言います。「要は、弱いものいじめを正当化する口実でしょ？」と。それにしても、自分のエゴを、相手の努力の問題にすり替えるとは、うまい文句を思いついたものです。



まあ、これは、よく小学生が特定の子供を「バイキン」扱いして「えんがちょ！」などと馬鹿にする、そんな幼稚な弱いものいじめと同じレベルです。いい年した大人がやるようなものではありません。

とは言え、そのように差別している人の気持ちも、全くわからないわけでもありません。「そういう人たちが自分の周囲にいと、友達に変な目で見られるのではないか」という恐れの気持ちから、そのような人たちを避けている人も少なくないでしょう。

でも、このような差別は、「心の清潔感」は感じませんし、そのような風潮に流されずに勇気を持って「ノー」と言えることこそ、人間の本当の強さではないでしょうか。

「※ただしイケメンに限る」？

「※ただし美女に限る」？

人を容姿で偏り見る傾向に疑問を投げかけている人は大勢います。その傾向を端的に表すネットスラングが、「※ただしイケメンに限る」です。男性向けファッション誌は、「理想の人物像」＝「清潔感のモノサシ」であるかのように、自分の周囲にはまずいないようなハンサム青年ばかり載っている、ある意味「現実離れたファンタジー」です。容姿に恵まれていないと、ファッション誌に載っているような格好良い服装や髪型で決めようと思っても、かえって浮いてしまう事があります。

「だからお前はモテないんだよ、もっと強気で攻めていけよ」というイケメン男子の恋愛アドバイスを実践しても、「何勘違いしてるの？」と露骨に嫌な顔をされたり、ひどい時はストーカー扱いされたりします。

「恋愛や結婚はイケメンのためのもので、自分とは一生縁がないのだ」とあきらめて、目立たないように人生を送ろうにも、街で人とすれ違うたびに「わあ、この人キモい！」と嘲笑されたり、露骨に嫌な顔をされる、そんな悲惨な経験を掲示板やブログに綴る人も少なくありません。

ところが、その種の掲示板やブログのすべてではないにしろ、「でも女性は美人に限る。ブスは嫌だ」という内容を平気で書いているものも



第二部 独身者と非婚問題・少子化問題



「内助の功」は死語？

「どうして結婚しないんだ。結婚すれば三食掃除洗濯風呂付き、家の事はみんな奥さんに任せて、楽になるぞ」

独身男性が、特に中高年の男性にこのように言われる様子を時々目にします。

「わかってないなあ。今は専業主婦の内助の功なんて時代じゃないのに…」言われた当人は心の中でこうつぶやいているものです。

「鍵っ子」も死語

ご存じかとは思いますが、今や「共働き」はどこでも見られる光景になりました。昭和の時代には、両親とも働きに出ていて日中留守なので、学校に家の鍵を持っていく子供たちは「鍵っ子」と呼ばれて、半ば哀れみの目で見られていたのですが、その言葉すら死語になるほど、すっかり当たり前前の社会になったものです。

特に今は、夫婦二人の稼ぎがないと子供を育てるだけの収入を得るのが大変、という状況も多いものです。

「昭和の昔は、子供がいっぱいいて、にぎやかだった」と言いますが、当時は、子供がある程度大きくなれば、畑仕事とか自営のお店の仕事を手伝ってもらうなど、「労働力」を当てる

できたからこそなのです。今ではそれが期待できないだけでなく、決して安くはない大学教育まで受けさせるのが——それも、昭和には普通に見られた「あなたは女だから高校まででいいでしょう」なんて時代ではなく、男女とも——当たり前になってきています。その「投資」も、不景気による就職難で、必ず「見返り」が期待できるとも限りません。

少子化対策の話になると、昔と今を単純に比較して「昔は普通にできた事が今はできないのか」なんて言う人がいますが、単純比較そのものが不公平なのです。

「家事を丸投げ」できない時代

とは言え、奥さんが家事全般をひととおりやっている、という家庭は、今でも少なくありません。これが専業主婦なら良いのですが、働きに出ているとなるとどうでしょう。

リビングのソファにのんびり座って「おい(奥さんの呼び方)、ビール！」なんてやろうものなら、「私一人に料理を作らせて皿洗いまでやらせて、自分はリビングでのんびりビールを飲みながらテレビ見て待ってるわけ？ 仕事終わって疲れてるのは一緒でしょ。というか、私の名前は『お



い』ではありません！」と、たとえ直接言わないとしても、奥さんは心の中でそうつぶやいてるかもしれません。

それでも、料理や洗濯や掃除くらいなら、何とか二人で分担できるかもしれません。でも、子供が生まれたらどうでしょう。夜中に赤ん坊が泣き出しても「うるさいなあ、何とか静かにさせてくれよ」で済ませることができた昭和のお父さんたちは、ある意味幸せ者です。家に帰ってきたら、父親も赤ん坊にミルクを飲ませたりおしめを替えたり、夜中も交代で世話をしたり、という光景は、だんだん普通になり始めています。

とは言っても、立派に子供を育てて「少子化対策に貢献」しているそんな夫婦も、必ずしも社会的に理解されているかという、そうとも限りません。会社にもよりますが、下手すると「子供に何かあるとすぐ休むので使いづらい」「毎日定時で上がるから協調性がない」などと陰口をたたかれることも珍しくありません。

特に今は社員の数が絞られているだけ、残された一人一人の負担は大きくなっていますが、それは男性だけでなく、働くことが当たり前になってきた女性もなのです。そんな状況で子供を育てながら働いている母親たちの苦労は、計り知れないものです。保育園に預けるにしても空きがなかなか見付からない、預けられることになっても、子供のお迎えがあるので残業はそんなに長くはできない、子供が病気になると普通には預けられないのでまた大変、といった具合で、それに加えて、家に帰ってきたら料理やら洗濯やら子供の世話やらで、てんてこ舞いです。（そもそも、育児休暇から復帰しようにも会社に戻れない状況に置かれた女性も多かったりして、それはそれでまた別の問題になっています。）

その苦労の半分を男性に振ればだいぶ楽になるでしょうが、男性が「育児休暇」を取る事や、子供を保育園にお迎えに行くために会社を早く上がったり、奥さんや子供が病気の時に会社

を休んで世話をしたりする事などについて、社会的な認識がまだまだ進んでいないのが、残念ながら日本の現実です。

男だって料理くらいできますよ

かつては、「男子厨房に入るべからず」と言っていて、台所仕事は女の仕事と相場が決まっていた。しかし今では、料理のできる男というものは全然珍しくなくなっています。加えて、昔と違い、自分で料理できなくても、冷凍食品もコンビニもファミレスもあって、金さえあればとりあえず喰うことには困りません。

ですから、「嫁さんもらえばうまいメシにありつける」という昭和っぽい発想は、もはや結婚の動機付けとしてはかなり弱くなってきているように思います。

それも、料理をはじめ家事全般を難なくこなせる、家庭に入れば良き「マイホームパパ」になれそうな男性ほど、独身でも生活にはあまり不便を感じないので、その点に関しては結婚の動機付けが弱くなってしまおうというのが、何とも皮肉なものです。

確かに少子化対策も重要です。しかし、今はもう、昭和っぽい「家庭の仕事を奥さんに丸投げする」事を前提とした発想が通用しなくなり始めているように思えます。目先だけ改革したところで、根本的な部分が改まらず、当事者の意識も変わらないなら、どんな少子化対策も結局無駄に終わるでしょう。残念ながら政府の対策はもう手遅れなのかもしれません。

結婚資金を奪う“独身税”

最近、「子供を産み育てるという社会的責任を果たしていない独身者には、『独身税』という形で懲罰的な制裁金をかけるべきだ」と主張する人も一部にいます。

実際、柴山昌彦衆議院議員がかつて自民党の子育て小委員会で「暴論ではあるが独身税をやってはどうか」と発言したことで、賛否両論が沸き起こっていた事は、記憶に新しいです。

しかし、このアイデアは本当に効果的なのでしょうか。ちょっと考えてみましょう。

結婚の強制は憲法違反

まず、「独身でいる事に対して懲罰的な制裁金を掛ける」という発想そのものが、憲法の定める「婚姻の自由」に反する可能性があります。

結婚とは、結婚する男女の合意によるものであり、結婚するかしないか、するなら誰と結婚するかは、他人が強制するものではありません。

「結婚したくない人は『独身税』を払えば“結婚逃れ”できるから良いではないか」といっても、それが法外な額だったらどうでしょう。たとえば、子供の養育費相当の額として、月に数万とか十数万払う事になったら、金持ち独身者ならともかく、貧乏独身者には、到底払えない額です。こうなると実質的に「政府による結婚・出産の半強制」で、それも戦前・戦中の「産めよ増やせよ」政策よりもひどいかもしれません。

“非婚の免罪符”

それでは、貧乏独身者でも払えそうな、月に数千円程度ならどうでしょう。今度は、「それくらいなら払ってでも独身のままでいいや」となって、独身税の「独身者を結婚へと追い立てる」効果がまるで無くなってしまいます。それどころか、「独身税を払っているんだから、これで十分だ

ろう」と、いわば“非婚の免罪符”にうまく利用されてしまうのは目に見えています。この事に「独身税」推進派は果たして気付いているのでしょうか。

憲法違反の宗教弾圧？

憲法違反なのは「婚姻の自由」だけでなく、「信教の自由」についても言えるでしょう。

皆さんは、独身の宗教家というと、どういう人を想像するのでしょうか。仏教系・キリスト教系の幼稚園や保育園や学校に通っていた方であれば、

独身のお坊さんとか^{シスター}修道女にお世話になったかもしれません。教会で結婚式を挙げた方も、もしかしたら独身の神父さんに祝福されて結婚したかもしれません。

これらの人も“子供を産み育てるという社会的責任から逃げている”として、懲罰的な制裁金を掛けるなら、お金はなくてもつつましくやっている独身の宗教家には大打撃です。逆に、高級車に乗って贅沢三昧のお坊さんや、濡れ手に粟で信者から金を騙し取るカルト宗教の教祖は生き延びるでしょう。これは一種の宗教弾圧といっても差し支えないではありませんか。

「彼らも結婚するよう、宗教の方を変えるべき」でしょうか。しかし、宗教の戒律を政府が圧力をかけて変えさせることがまかり通ると、ちょうど戦前・戦中の宗教弾圧の時代のような事になります。テロなど甚だしい反社会的行為を止める場合を除き、政治が宗教に介入することは遠慮すべきではないでしょうか。

仮に百歩譲って「独身税」を導入するとしても、このように宗教的信条ゆえの独身者からは免除すべきかもしれません。もっとも、「独身税逃れの出家」を考える人も出るでしょう。でも、こう

“命のバトンを次世代に渡す”のは“人間の義務”？

生命の誕生はしばしば「命のバトン」に喩えられます。確かに、適切な喩えです。私は幼い頃は赤ん坊嫌いでしたが、後に赤ん坊の子守をするようになってから意見が変わりました。赤ん坊の世話には尋常でないほど手間がかかって疲れるけれども、とにかく細かい理屈抜きで何とも可愛いし、その成長していく姿、そしてこのようにして命が受け継がれていく様を見るのは本当に神秘を感じるものです。

しかし、この「命のバトン」とは、単なる比喩であることを決して忘れてはなりません。人間は木やプラスチックで出来たバトンと違い、一個の人格と知性を持った生身の人間です。

それなのに、この比喩を使う人の中には、生身の人間を単なる道具、「命のバトン製造器」に貶めてしまっている人も一部にいるのではないのでしょうか。私にはそんな気がしてなりません。

「命のバトンは次の世代に渡されるためにある。つまり生命の存続こそが人間の生きている目的であり、その義務を果たさない人間は無責任だ」。にわかに少子化が社会問題として叫ばれるようになってから、たとえばこんな主張を何度聞いたことでしょうか。中には、「次世代に命のバトンを渡せない人間は落伍者だ」とか「そしてそんな人間が淘汰されて強い種が生き残るのは人類にとって益になる」などと、優生学的意見を述べる人も少なくありません。

少子化をダシにした差別発言

私個人はこのような風潮に危機感を感じています。率直に言って、これは差別発言、それもアドルフ・ヒトラーの優勢思想を思い出させるような危険思想なのですから。

「次世代に命のバトンを渡せない人間は落伍者だ」などという暴言、この意見が本当に正しい

と信じているのなら、それでは、不妊症の女性に、かつてハンセン病施設にいた元患者に、配偶者のいない障害者に堂々と言えますか。そんな相手なら遠慮するのに、大人社会の弱者たる若者が相手なら許されるのですか。ブサイクが相手なら許されるのですか。

そういう人も普段は「セクハラ発言や差別発言をやめよう」「ロリコンコンテンツは有害だから規制しよう」と主張していて、表面上、女性や子供や障害者といった弱者をいたわっているアピールをするかもしれません。しかし、こういう別の形での弱い者いじめをしていて、心の中も優生学に基づいた差別的な思想で汚染されているなら、それは偽善にしか見えません。

「そんなに動物の本能が好きだったら、お前、人間止めて動物になれ」

確かに、動物の世界は弱肉強食であり、足の萎えた子鹿は逃げられずにライオンに喰われて子孫を残せない、異性を獲得できなかった雄は子孫を残せない、そして弱い個体が減んで強い個体が生き残る、これはある意味事実です。

しかし、人間もそれを見倣えというのは、何かの冗談でしょうか。私は言いたいのです。「そんなに動物の本能が好きだったら、お前、人間止めて動物になれ」、と。

でも、「弱い個体が減んで強い個体が生き残る」って事自体も、どうやら怪しい。「“強い個体”がそんなにいいんなら、お前、恐竜になれ。氷河期に絶滅するけどな」と言いたいところです。代わりに、嫌われ者のゴキブリはどんな環境にも適応してしぶとく生き延び続けているのは、皆さんご存じのことでしょう。

霊長類でいうなら、アウストラロピテクスも北

京原人もクロマニオン人も絶滅して、“より劣った形態”であるはずのチンパンジーやゴリラやオランウータンは生き残っています。

日本をはじめとした先進国の少子化問題は、ただ単に子供の数を増やただけで簡単に解決する問題ではないというのが私の持論ですが、それは、氷河期にたとえ恐竜の数が激増したところで、絶滅は免れなかったらう事と同じです。

閑話休題。人間の人間たるゆえんとは、動物と違って本能だけで生きていないところにあります。動物は、脳という“ROM”のプログラム通り、生まれ育って、餌を喰って、繁殖して、ただ種の生存だけを目的として生きているだけの存在ですが、人間は動物と違って知性や感情、とりわけ「愛」の発達した生物です。動物とは違って、時には生存競争に反してでも利他的な精神を他の個体に示すという“奇妙”とも思える行動をする生き物なのです。

第一、人間は「自分の人生の目的とは何だろう」と悩むところからして、他の動物とは大いに異なります。「ただ生まれ育って、うまい飯を毎日喰って、結婚して子供が生まれて、それだけが人生の目的だろうか」なんて、他の動物は悩みませんが、人間は悩みます。

「それだけ」ではないものとは、何でしょう。実は、動物と違って人間だけは、後の世代に、「命のバトン」以外のものを残せるのです。

人間だけ残せる、文化のバトン

作曲家のベートーヴェン、ショパン、ブラーム



スをご存じですか。これらの人は生涯独身であり、動物的に見るなら、自分のDNAを後の世代に残せなかった“弱い個体”ですが、ほとんどの人はそうみなすどころか、むしろ「偉大な音楽家」とほめたたえる事でしょう。自分のDNAこそ後の世代に残せなくとも、たくさんの優れた音楽作品を残し、後の世代を別の意味で育ててきたからです。幼い頃母親がショパンやブラームの子守歌を歌ってくれた、という経験を持つ人も多いでしょう。

他の分野についても同じ事が言えます。一番よくわかる例が宗教家です。昔も今も仏教の僧侶には有名無名を問わず独身者が多く、イエス・キリストも生涯独身だったのは有名です。しかし、彼らは「命のバトン」をつなげられなかった“落伍者”でしょうか。彼らが後の世代に与えた影響を考えると、そうでない事は明らかです。他にも、樋口一葉や宮沢賢治の残した文学作品、小津安二郎の残した映画など、枚挙にいとまがありません。

これらの人々は、たとえ自分が「命のバトン」を渡すことができなくとも、間接的な方法で後の世代に多大なる貢献をしてきた人物です。つまり、後の世代の人々に喜びや活力や生きる希望を与え、人生の道しるべを提示し、結果として一人や二人ではなく数百万、数十億の子供達を間接的に“育てて”きたのですから。

一介のサラリーマンに過ぎない人でさえも、後の世代に残せる「命のバトン」以外のものがある事は、NHK でかつて放映されていた「プロジェクトX」を見れば明白です。

誤解のないように付け加えておくと、私は「命のバトンを渡す」事の重要性を軽視しているわけではありませんし、それが人間にとって最も大切な仕事の一つであることには同意します。しかし、人間は結婚と出産が人生の唯一の目的ではありません。それ「だけ」が人生の唯一の目的であり、その機会を逸した人は人生の落伍者であるかのような意見には、同意するわけに

はいきません。それはなぜかというと、人間は動物ではなくて人間だからです。

人間の人間性を無視して、まるで卵を毎日ポンポン産むブロイラーのような「子を産む道具」のようにみなすのは、残酷な事です。皇室に長い事「命のバトン」たる男児がお生まれにならなかった事でひどく思い悩まれた雅子妃殿下の事を考えると、特にそう思います。

「命のバトン」を渡せなくても出来る ことがある

今後少子高齢化が進むにつれて、一部の心ない人たちは、「命のバトンを渡す」役に残念ながらあずかる事のできない人の事を、いよいよ悪しざまに言うことでしょう。

その役についていない人は、彼らの言うように「社会のお荷物」でしょうか？ いいえ！ 機会があれば逆に「荷を負う」のを手伝ってみましょう。

子供を産み育てるという“戦いの最前線”に

立つ人も必要ですが、それらの人々を助ける“後方支援”だって必要です。その点、独身とか子供がいない人にも、それぞれの立場を活かした社会貢献ができるかもしれません。具体的にどんな事ができるのか、考えてみましょう。

そもそも、「独身者は子供を産み育てるという社会的責任を果たしていない」という前提自体が正しいかというと、実はそうではありません。一例を挙げるなら、子供を持っている親がお世話になる幼稚園や保育園では、独身の先生もたくさん働いているのは、皆さんご存じでしょう。

もしその機会があるなら、子守や大変な仕事を手伝う事や、育児を支援するシステムを構築する事を含め、その大役を担っている人達の荷を軽くしましょう。私自身もかつて微力ながら少し行ってきましたが、これは、その“命のリレー”に間接的に協力する事になるのです。

【コラム】「酸っぱいブドウ」？

「非モテが『恋愛なんてくだらない』と決めつけるのは、イソップ物語の『酸っぱいブドウ』と同じだ』と言う人がいます。

本当にそうでしょうか？——いいえ、一つだけ違います。その物語のキツネは「甘いブドウ」の味を知っていましたが、多くの非モテは生まれてこのかた一度も味わったことがないのです。